

## 2022年6月の大気大循環と世界の天候

### 大気大循環

500hPa 高度をみると、地中海～バレンツ海～東シベリア西部付近、アラスカ南部～カナダ北部～北大西洋中緯度帯の中部、米国南東部で正偏差、カナダ南東部、グリーンランド、西シベリア南部、北太平洋の北緯45度帯で負偏差となった。200hPa 風速をみると、亜熱帯ジェット気流はユーラシア大陸上で南北に蛇行した。偏西風は、北太平洋中部～東部で平年の位置と比べて南寄り flowed。海面気圧をみると、北大西洋中緯度帯の中部、カラ海付近、オホーツク海、アラスカ～カナダ北部で正偏差、グリーンランドの東海上、西シベリア、中国東部で負偏差となった。850hPa 気圧をみると、地中海付近、バレンツ海～東シベリア西部、中東～東アジア付近で高温偏差、グリーンランド周辺、カスピ海の北、北太平洋の北緯45度帯で低温偏差となった。

熱帯の対流活動は、平年と比べて、インド洋赤道域～インドネシア南部付近、中米付近～北大西洋西部の熱帯域、西アフリカ付近で活発、ベンガル湾～太平洋赤道域の日付変更線付近で不活発だった。赤道季節内振動に伴う対流活発な位相は、太平洋東部～アフリカ～インド洋を東進したが、中旬頃はアフリカ付近で一時的に東進が不明瞭となった。対流圏上層では、ユーラシア大陸上の亜熱帯ジェット気流に沿って波列パターンが見られ、中東北部付近や東アジア西部で高気圧性循環偏差となった。また、対流圏上層の太平洋東部～大西洋の熱帯域では、南北半球対の高気圧性循

環偏差となった。対流圏下層では、太平洋熱帯域の西部で南北半球対の高気圧性循環偏差となり、特にフィリピンの北東海上で明瞭だった。また、対流圏下層の南米～大西洋西部では、南北半球対の低気圧性循環偏差となった。海面気圧は、熱帯域では、太平洋で正偏差、南米～アフリカ～インドネシア付近で負偏差となった。南方振動指数は+3.1だった。

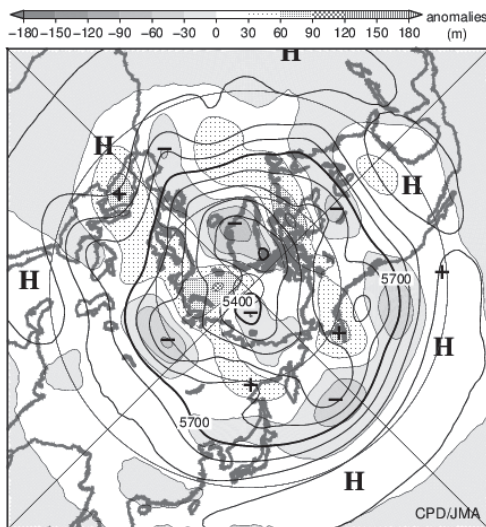
### 世界の天候

世界の月平均気温偏差は+0.27℃(速報値)で、1891年の統計開始以降、6月として3番目に高い値となった。6月の世界の平均気温は、上昇傾向が続いており、長期的な上昇率は約0.71℃/100年(速報値)である。主な異常天候発生地域は次のとおり。

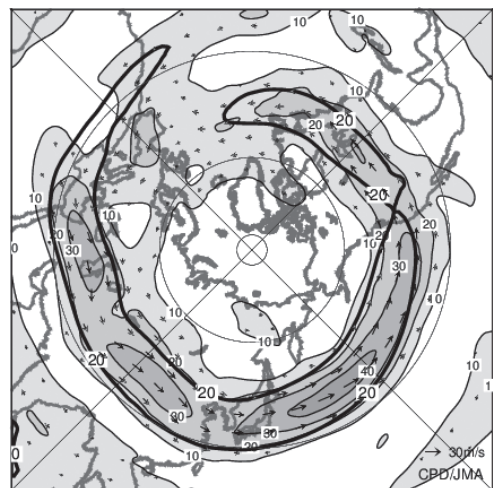
- 東日本～中国北西部、ヨーロッパ中部～北アフリカ北部で異常高温、カリマンタン島南西部～スマトラ島、コロンビア北西部及びその周辺で異常低温となった。
  - スラウェシ島南部～スマトラ島、コロンビア北西部で異常多雨、ロシア西部～ヨーロッパ東部、米国南東部及びその周辺で異常少雨となった。
- (気象庁 大気海洋部 気候情報課)

※ より詳細な情報については、気象庁ホームページ「気候系監視速報」をご覧ください。

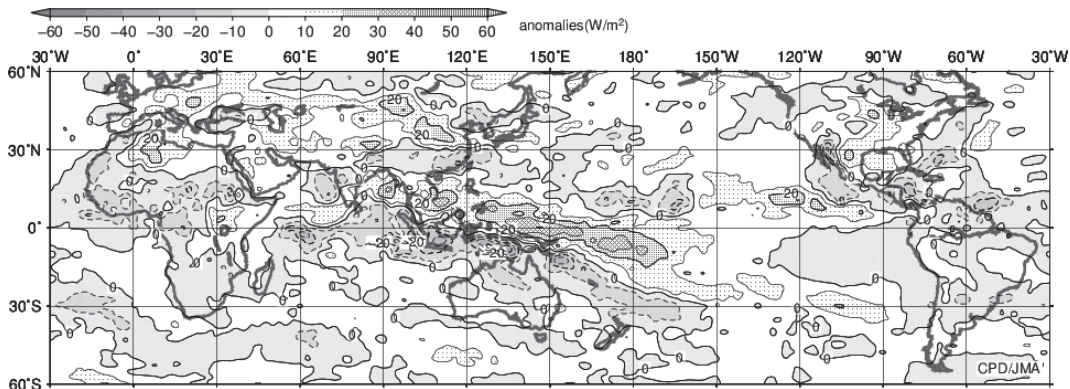
<https://www.data.jma.go.jp/cpd/diag/sokuho/index.html>



2022年6月の北半球月平均500hPa 高度及び  
 平年偏差  
 等値線間隔は60m。陰影は平年偏差。平年値は  
 1991～2020年の平均値。

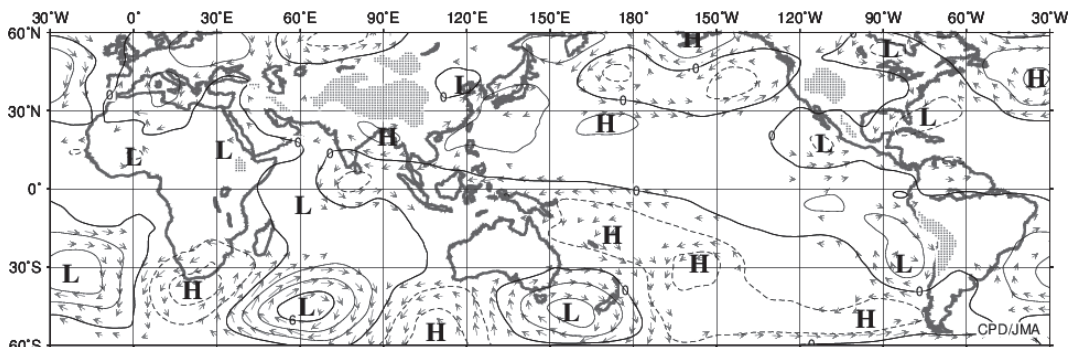


2022年6月の北半球月平均200hPa 風速及び  
 風ベクトル  
 等値線間隔は10m/s。太実線は平年の風速で等値  
 線間隔は20m/s。平年値は1991～2020年の平均値。



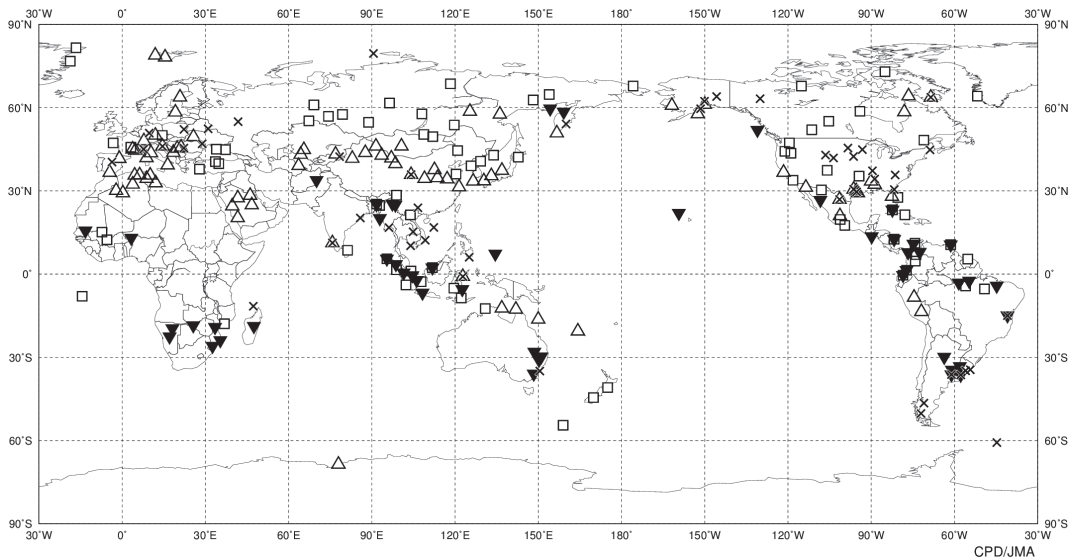
2022年6月の月平均外向き長波放射量年偏差

等値線間隔は $10\text{W/m}^2$ で、値が小さいほど対流活動が活発であったと推測される。米国海洋大気庁 (NOAA) より提供されたデータを用いて作成。年偏差は1991~2020年の平均値。



2022年6月の月平均850hPa 流線関数年偏差及び風年偏差ベクトル

流線関数の偏差の等値線間隔は  $2 \times 10^6 \text{m}^2/\text{s}$ 。年偏差は1991~2020年の平均値。



2022年6月の世界の異常天候分布図 △異常高温 ▼異常低温 □異常多雨 ×異常少雨  
異常高温・低温は標準偏差の1.83倍を超える場合、異常多雨・少雨は降水5分位値が6及び0。